

宗教教育としての坐禅

愛知学院大学 岡島秀隆

宗教教育の意味および必要性の議論は重要である。そこには多様な社会現象の中で宗教現象という領域をどのように位置づけ、どのように評価するかといった問題や個々の人間の自己実現や生き方に宗教がどのような効果をもたらすかといった問題まで、さまざまな切り口が存在している。また、私立大学教育の現場で課題となっている自校教育のあり方との関連も当然想定されるところである。

そこで、宗教教育が知育中心に実施されている現状を踏まえたうえで、宗教教育における実習教育（体験学習）の役割を考えてみると、それは知育の内の徳育に関連して、その有効性が予測されるのではないかと。現代社会は価値の多様化が進み、特定の通過儀礼を通して集団で共有すべき価値を受容することが不可能となりつつある。この個人主義の時代においては、個々人が自力で世界観や倫理観を探究しなくてはならない面がある。近年の徳育待望論をも念頭に置きつつ、こうした時代における実習教育の役割効果を考察するという方向性には可能性があるように思える。

ただ、禅・仏教と社会倫理・道徳を直接結びつけることは、性急に過ぎる。元より禅は身心一如、行学一体を理想とする人間観を標榜しているが、それが教育の場において人間形成の規範となり、さらには社会的人間の倫理観の基礎として位置づけられる可能性は、禅・仏教が持つ厭世的傾向を先ずもって差し引かなければならないからである。むしろ、それを日常性および現実性の反定立として位置づけ、社会認識と倫理・道徳の深化をもたらす批判要素として受容することによってこそ、禅・仏教の教えは真価を発揮するのではなかろうか。

禅は善悪美醜正邪嫌好の彼岸を起点とする。このことは逆説的に、こうした二元的価値観が人間社会特有のものであることを強く再確認させてくれる。そしてさらに、禅のさまざまな方法手段は、人間の生き方や教育という行為に多くの有用な示唆を与えると考えられる。

本論では先ず、現代人が坐禅の体験学習をどのように感じているかをアンケートの集計結果から推測するとともに、「自己実現」という行為の敢行の過程で坐禅がどのような役割を担うかを考察したい。

具体的には、坐禅に伴う効用と考えられる点を、アンケート調査から推測する。設問は坐禅は精神の安定に役立つか、坐禅は集中力の増進に役立つか、坐禅はストレスの解消に役立つかといったものである。これらの効用は坐禅本来の意義とは異なるが、現代人の心的欲求に適っているので、体験実習の利点となり得る諸要素といえる。

さらに坐禅が自己実現に不可欠な「人間探究の原点（ゼロポイント）」を示唆する点や公案などの禅の言葉を手掛かりにして、この原点回帰への方法を考察してみる。最も根源的な意味での自己実現の在り方は宗教的人間の自己実現の姿の中にあると思われるからである。そして、この根源的自己の探究と実現に資することこそ、宗教教育の核心と考えるのである。

【キーワード】 実習教育（体験学習）、原点回帰、自己実現